

農村地域における持続可能な 景観まちづくりに関する研究 -岩村町富田地区の景観まちづくり過程を通じて-

馬上 和祥¹・横内 憲久²・岡田 智秀³・川島 正嵩¹

¹学生員 日本大学大学院理工学研究科 不動産科学専攻 博士前期課程
(〒274-8501千葉県船橋市習志野台7-24-1, E-mail:blackbird_nmck@yahoo.co.jp)

²正会員 工博 日本大学理工学部 建築学科
(〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14, E-mail:yokouchi@arch.cst.nihon-u.ac.jp)

³正会員 工博 日本大学理工学部 社会交通工学科
(〒274-8501千葉県船橋市習志野台7-24-1, E-mail:okada@trpt.cst.nihon-u.ac.jp)

¹学生員 日本大学大学院理工学研究科 不動産科学専攻 博士前期課程
(〒274-8501千葉県船橋市習志野台7-24-1, E-mail:csms10006@g.nihon-u.ac.jp)

昨今の高齢化や過疎化、景気低迷などの影響を受けている地方小都市において、各地でその存続が危ぶまれている。そこで近年では、こうした地域の振興策のひとつとして、地域の暮らしを活かした景観まちづくりが注目を集めている。しかしながら、産業や風土によって形成される暮らしの景観は、金銭補助や仕組みの構築だけではその継続は困難であり、重要なのは、地域の価値を未来へとつなげる地元住民の「意志」と「実践的取組」である。そこで本研究では、持続可能な景観まちづくりに資する知見の導出に向け、「農村景観日本一」と称される農村景観を有し、20年以上にわたり景観まちづくりを積極的に取り組んできた岐阜県恵那市岩村町富田地区を対象に、地区の景観まちづくりの契機とその発展経緯を明らかにした。その結果、外部からの景観評価とその価値の名付けを契機に、景観体験やまちづくり資金獲得の仕組みの構築を行うことで、持続的な発展を遂げていた。

Key Words : *Landscape Planning, Iwamuracho Tomida district of Gifu prefecture, Rural Landscape*

1. はじめに

昨今の高齢化や過疎化、景気低迷などの影響を受けている地方小都市において、特に農村地域は各地でその存続が危ぶまれている¹⁾。こうした地域の振興策のひとつとして景観まちづくりが注目を集め、景観計画の策定や棚田オーナー制の導入など、様々な活動が実施されている²⁾³⁾。しかし、農村地域での景観まちづくりは、そこに暮らす人々の活動や生業によって生みだされる生活景観が対象となるため、景観計画などによる規制や誘導、補助金頼みや仕組みの構築だけではその活動の継続は困難であり、重要なのは地域の価値を未来へとつなげる地元住民の「意志」と「実践的取組」である²⁾³⁾。

そこで本研究では、「農村景観日本一」と称され、現在まで20年以上にわたり景観まちづくりを実践している岐阜県恵那市岩村町富田地区(以下、富田地区)を対象に、そこでの景観まちづくりの過程を明示し、今後の地域持続にむけた景観まちづくり方策に関する知見を導き出すことを目的とする。

2. 本研究の位置づけ

農村景観の管理方策に関する研究は、都市計画・造園・農村計画などの様々な分野でされてきた。なかでも、農村景観の今後の景観管理方策を示した研究には宮前ら⁴⁾のものがあるが、景観管理方策の方向性を示すにとどまっており、まちづくりが発展していく過程での住民の意識変化については言及されていない。また、本研究と同じ富田地区を対象に、都市農村交流(アグリカルチャートレーニング、以下ACT^{※1)}事業を活用した農村景観の保全方策に関する北澤の研究⁵⁾も見られるが、ACT事業のみを対象としており、本研究が意図する富田地区の景観まちづくりを総合的に分析したものではない。本研究は、富田地区の景観まちづくり活動の発展要因と持続に向けた活動内容の把握から、今後の景観まちづくり方策の知見を導き出すものである。

3. 研究方法

(1) 調査方法

富田地区のこれまでのまちづくり活動の発展経緯とその要因を捉えるため、地域史の文献調査と、まちづくり組織に対するヒアリング調査を実施した(表-1, 2)。本稿では、これらの結果を通じて富田地区の景観まちづくり過程について考察する。

(2) 富田地区の概要(図-1, 写真-1)

岐阜県南東部に位置する富田地区は、水晶山の麓に水源を有し、地区の南北に流れる富田川に沿って形成される山間盆地である。そのため富田地区は豊潤で肥沃な土地となっており、縄文時代から古代農耕の発展地として開け、現在まで農業を主産業とし続けてきた農村地域である⁶⁾。地区内には神社やお堂などの伝統的景観資源が現在もなお数多く点在しており、それらの維持管理を通じて「組」や「講」などの伝統的なコミュニティも残ってい

表-1 調査概要

調査方法	現地調査	文献調査	ヒアリング調査(電話および直接対面式)
調査期間	2010年 8月22日~28日 12月7日~9日	2010年 9月1日~12月20日	2010年8月22日~28日 9月20日~30日, 12月7日~9日 2011年1月29日
調査対象	富田地区全域	・岩村町史 ・富田地区に関する歴史資料	・富田運営会・富田をよくする会・富田堂農組合 ・NPO法人農村景観日本一を守る会 ・岐阜県・恵那市役所・岩村振興事務所
調査内容	・富田地区の変遷・写真収集・まちづくり活動の把握		

表-2 富田地区の景観形成活動主体の概要

組織名称	富田をよくする会	NPO法人農村景観日本一を守る会	富田堂農組合	岩村町まちづくり実行委員会
設立年	平成5年	平成21年	平成17年	昭和42年 (平成20年解散)
組織形態	任意団体	NPO法人	任意団体	任意団体
人員	80名 (富田地区全戸加入)	73名 (賛助会員28名)	159名 (うち作業員7名)	100名
活動資金	・会費(現在はなし) 1,000円(年/人)	・会費(年/人) 正会員3,000円 賛助会員1,000円 ・自主事業	・農地受託管理料 ・作物の売り上げ ・国庫補助金 ・出資金	不明
主な取り組み	・秋の月待ちお堂めぐり 三昧神の参道整備 ・富田会館の維持管理	・茅の宿経営 ・不動産の散策路整備	・農地の受託管理 農道・水路の整備 ・米のブランド化	・農村景観日本一の展望台建設 ・レディーズマラソン
備考	・富田会館の管理を恵那から指定管理者として請け負う ・管理料571,000円(年)	・対外的な取り組みを行う際、地域の窓口として機能 ・富田をよくする会を前身とした組織	・定年を迎えた兼業農家を作業員として雇用 冬期には水路整備などで雇用を創出	・市町村合併に伴い2008年4月に解散 ・活動がホットしむむららが継承

る⁷⁾。この富田地区の農村景観は、平成元年に国土問題研究会より「日本一の農村景観」と称され⁸⁾、現在では景観体験イベント「秋の月待ちお堂めぐり」などをはじめとする景観を活用したまちづくりを積極的に展開している。

4. 富田地区のまちづくり活動の発展経緯

表-3は富田地区の景観まちづくりの取り組みを時系列に並べたものである。以降ではこの表をもとに、景観まちづくり活動の発展要因と景観形成上の工夫点について論考する。

(1) 地域の景観に対する意識の変化(表-4)

a) 「農村景観日本一の展望台」の設置—平成元年に富田地区は、国土問題研究会から、『全国で300カ所ほどの農村を見たが、富田地区が日本一素晴らしい』と称賛されたが、当時、住民は自分達の村が日本一の農村景観だという自覚がなく、この評価は必ずしも地元を受け入れられなかった。しかし、『日本一の農村風景はどこですか』などの問い合わせが相次いだため、岩村町のまちづくり組織である「岩村町まちづくり実行委員会」は、「農村景観日本一の展望台」(以下、展望台)を建設した⁹⁾。そして、そこからあらためて自分達の村を一望したところ、



写真-1 富田地区の農村風景(展望台より著者撮影)

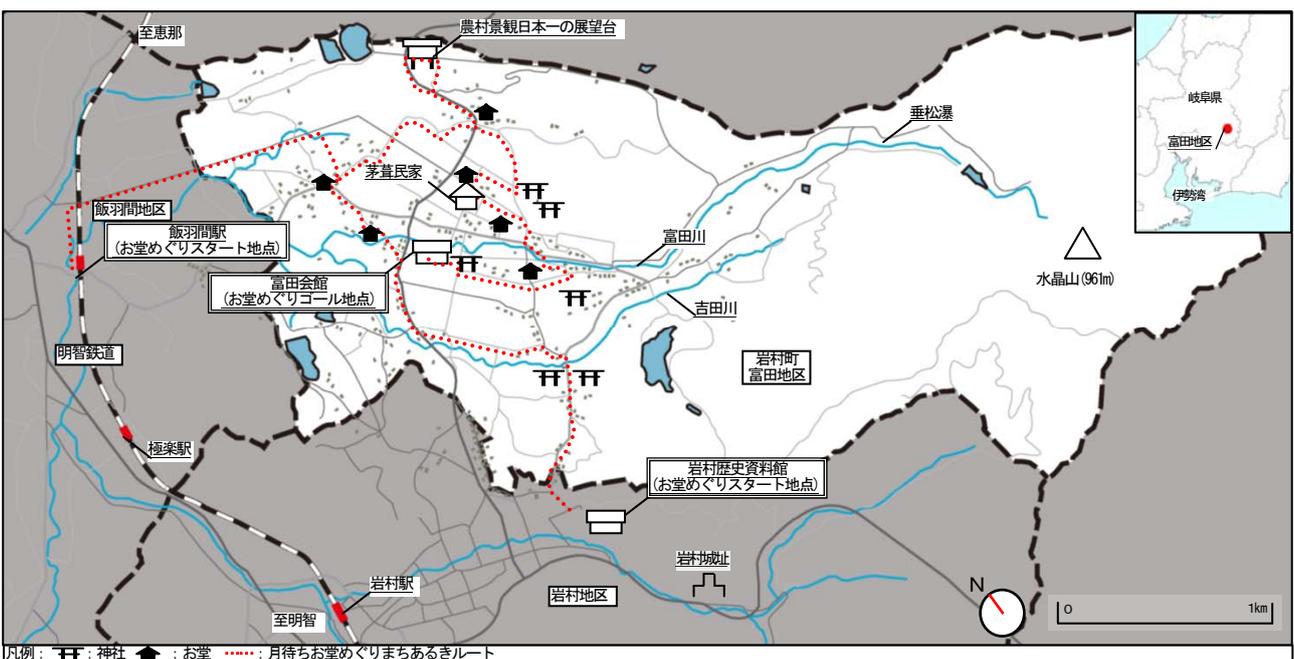


図-1 富田地区概略図

表-3 富田地区のまちづくり活動の変遷

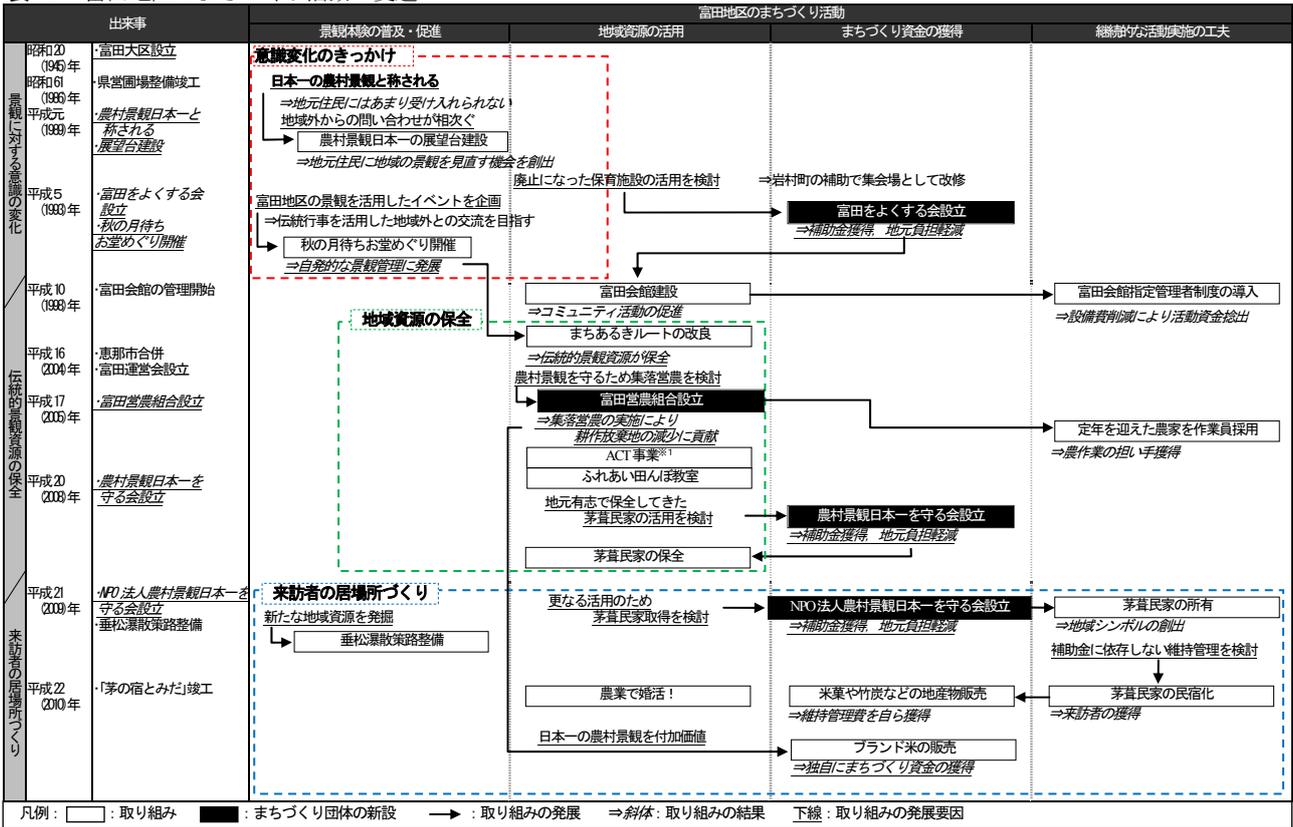


表-4 景観に対する意識の変化の効果および工夫点

景観形成活動	農村景観日本一の展望台の設置	秋の月待ちお堂めぐりの開催
現地写真		
目的	視点場の創出による景観体験 建設：平成元年 改築：平成13年	来訪者と地元住民の交流 平成6年
活動主体	岩村町	富田をよくなる会 ・地元住民 ・岩村町
活動資金源	ふるさと創生事業(国)	参加料、協賛金
効果	<ul style="list-style-type: none"> 涙を流して感動する人もいる 自分の村を一望することで再認識 	<ul style="list-style-type: none"> 毎年約1,000人が町へ来訪 参加者の声「日本一の農村景観といわれているだけありますね」 「地元住民の声」だれもこなかった村にカラフルな都会の人がたくさん来て、自慢できるようになった
景観体験上の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> 農村風景が最もよく見える場所を捜し出して展望台を設置 重宝「ふるさと」の歌碑を展示し細密を感じさせる 村をよく見せるためかさ上げを行う 前面の木の剪定 	<ul style="list-style-type: none"> 多くの住民が加わる伝統行事の活用 まちあるきルートに地域資源を追加していくなどの改良を加える 安全確保のために国道を避ける 農家が「秋の月待ちお堂めぐり」の時期に稲穂を残すため稲刈りを遅らせる 住民がルート周辺を自発的に草刈り

思わず涙をこぼす人も現れるなど、展望台の設置は、地元住民と第三者の両者において富田地区の景観価値を認識するきっかけとなった。

b) 景観体験イベント「秋の月待ちお堂めぐり」の開催—平成5年から来訪者と地元住民の交流を目的とした地域活性化の取り組みとして「秋の月待ちお堂めぐり」を始めた。これは、秋の彼岸の中日に、講仲間がお堂に集まる「お立ち待ち」と呼ばれる風習を活用したものであり、地区に点在する5箇所のお堂を巡りながら農村景観を楽しむものである。そのまちあるきルートは、経塚や銭神、展望台などの既存の地域資源を追加するなど、年々改良をくわえていった。こうした工夫により、近年では毎年約1,000人が参加し、立寄り地であるお堂では、地元住民が参加者をもてなすことで交流が図られていた。その際、

参加者から『日本一の農村景観といわれているだけありますね』などの景観に対する評価が地元住民に伝えられ、地元住民は『だれも来なかった村にカラフルな都会の人がたくさん来て、自慢できるようになった』など、自分の村に対する誇りが育成されていった¹⁰。その結果、地元住民の景観に対する意識が高まり、「秋の月待ちお堂めぐり」の時期に稲穂が残る風景を残すために稲刈りを遅らせる農家や、まちあるきルート周辺の雑草刈りを行う地元住民が現れるなど、自発的な景観管理が展開されはじめた¹⁰。

このように、富田地区では地域を一望できる展望台の設置や、来訪者との交流を生む景観体験イベントの開催が、第三者からの景観評価を地元住民に伝え、地域の景観を見直す機会となることで、近年の地域シンボルの創出に向けた「茅葺民家」の保全・活用や、失われていた地域資源を復活させた「垂松瀑散策路」の整備などのまちづくり活動へ結びついていった。

(2) 伝統的景観資源(お堂、農の活動景)の保全(表-5)

a) お堂・神社の保全活動—富田地区では「秋の月待ちお堂めぐり」のまちあるきルートにお堂や神社などの伝統的景観資源を取り入れることで、活動を通じてそれらの資源が保全され、現在もお継続的な維持管理が実現していた。さらに、「秋の月待ちお堂めぐり」は地区の伝統行事を活用したことで多くの住民が参加・関与でき、現在までの持続的な活動の継続に繋がっていた。

b) 集落営農による農の活動景の維持—農家の高齢化や担い手不足など、地方の農村が抱える課題においても富田地区は例外ではなく、耕作放棄地が増加傾向にあり、農村景観の存続が危惧されている。こうした問題に対し富田地区では、農業の継続による農村景観の保全に向け、平成17年に集落営農組織「富田営農組合」を立ち上げた。「富田営農組合」は、農作業の継続が困難となった農家から農地を受託管理することで耕作放棄地の減少に努めている。また、集落営農組織は、国からの補助があるとともに、定年を迎えた兼業農家を作業員として雇用できるほか、「農業体験事業」などの際に組織が管理する耕作放棄地を提供することで農の風景の維持を図っていた。

このように、伝統行事を活用した「秋の月待ちお堂めぐり」や集落営農組織による農業の維持など、まちづくりを実行する組織だけにすべてを委ねるのではなく、多くの住民を巻き込み集落単位で継続的に関わりながら保全に努めることが、伝統的景観資源の存続に大きな役割を果たしていたと考えられる。

(3) 景観を活用した来訪者の居場所づくり(表-6)

a) 茅葺民家—平成15年に地域内で唯一残っていた茅葺民家は、所有者の高齢化とともに屋根の葺き替えが困難となり、居住に支障がでるほど荒れ果てていた。そこで、地元の有志が集まり、ボランティアで建物の修復を行い茅葺民家の保存を図った。しかし、茅葺屋根の葺き替えは専門の職人に委託する必要があるため、その資金として、国の「農山漁村(ふるさと)地域力発掘支援モデル事業」による補助金を受けるにあたり、新設団体であることが条

件であったため、これまで活動の主体であった「富田をよくする会」とは別に、新たな地域団体として「農村景観日本一を守る会」を設立した。そして茅葺民家の所有者と10年の貸借契約を結び、その後の活用方策を検討していたところ、所有者による民家売却の危惧が高まった。そこで茅葺民家の取得を決め、その際に法人格が必要となったため、「農村景観日本一を守る会」を法人化して「NPO法人農村景観日本一を守る会(以下、農一会)」を新設し、茅葺民家の保全・活用にあたった。こうして、現在では茅葺民家を民宿や集会場として利活用することで、維持管理費の捻出を図っているほか、茅葺民家で地元住民が作った米菓や竹炭などの地産物の販売受託も始め、その売上金の10%を茅葺民家の維持管理費にあてることで、地域のシンボルの保全に取り組んでいる。

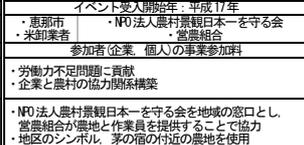
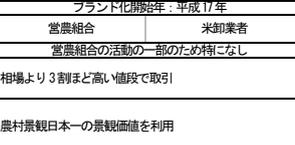
b) セルフビルドの垂松瀑散策路—水晶山の麓にある垂松瀑は富田地区の水源であり、古くから地元住民に崇められていた。しかし、昭和の中頃から、垂松瀑へとつながる山道が荒れ果てたことで、そこに近づくことが困難となった。平成21年になると、垂松瀑を地域の資源として再生させる気運が高まり「農一会」の有志が集まり、散策路の材料となる間伐材の調達からその施工までをすべて自らの手で行った。

c) 農業体験の場づくり—富田地区では平成17年より、恵那市と米卸業者が協働で民間企業向けの農業体験型研修として「ACT事業」を企画するほか、小学生を対象とした「ふれあい田んぼ教室」、農業体験を通じて結婚活動を行う「農業で婚活！」など、様々な農業体験事業が行われている。これらの事業は、「農一会」が地区の窓口となり運営に協力し、「富田営農組合」が作業協力と農地の提供を行うことで実現されている。その提供される農地は、茅葺民家の周辺の耕作放棄地が選定され、茅葺民家を起点とした景観形成活動が展開されるなど、参加者に富田地区の農村景観を体験してもらう様々な工夫が行われている。また、こうした取り組みにより収穫された米は、「農村景観日本一の地で収穫されたお米」としてブランド化し、地区内外へと直販することで、相場より3割ほど高い値段での取引が実現している。

表-5 伝統的景観資源の保全の効果および工夫点

景観形成活動	伝統的景観資源の保全	集落営農による農の活動景の維持
現地写真		
目的	祭事の継続	営農の継続
開始年	古来	古来/平成17年
活動主体	協力主体: 区(神社)組(お堂)/山の講(祠)	営農主体: 農家
活動資金源	会費(各組織とも)	営農組合
効果	・伝統的資源の維持管理 ・コミュニティの持続	・農地の継続的利用 ・耕作放棄地の改善
継続上の工夫点	・国庫整備時に移設や消失させなかった ・ルールを取り地力を増強し祭事を継続 ・お堂めぐりにより住民が自発的に管理	・大型農耕機を導入した農家が個人の困難な農家を支援 ・農作業のみの委託と土地利用権そのものの委託の2種類の形態を採用(営農組合)

表-6 景観を活用した来訪者の居場所づくりの効果および工夫点

景観形成活動	茅葺民家「茅の宿」		垂松瀑散策路		農業体験の場づくり	
	茅葺民家「茅の宿」	茅葺民家「茅の宿」	垂松瀑散策路	垂松瀑散策路	農業体験事業 (ACT事業 ふれあい田んぼ教室、農業で婚活!)	富田米のブランド化
現地写真						
目的	地域シンボルの創出	地域シンボルの創出	新たな地域資源の復元	新たな地域資源の復元	農業体験とそれを通じた交流	新たな収益の獲得
開始年	保全開始年: 平成20年 民泊開始年: 平成22年	保全開始年: 平成20年 民泊開始年: 平成22年	施工年: 平成21年	施工年: 平成21年	イベント参加開始年: 平成17年	ブランド化開始年: 平成17年
活動主体	NPO法人農村景観日本一を守る会	NPO法人農村景観日本一を守る会	NPO法人農村景観日本一を守る会	NPO法人農村景観日本一を守る会	恵那市、米卸業者、NPO法人農村景観日本一を守る会、営農組合	営農組合、米卸業者
活動資金源	民泊利用料/会費/個人商品の受託販売手数料	民泊利用料/会費/個人商品の受託販売手数料	ボランティア活動	ボランティア活動	参加者(企業、個人)の事業参加料	営農組合の活動の一部のため精ごなし
効果	・新たな居場所の獲得 ・地元住民の活動のステップ創出 ・地産物の販路拡大	・新たな居場所の獲得 ・地元住民の活動のステップ創出 ・地産物の販路拡大	—	—	・労働力不足問題に貢献 ・企業と農村の協力関係構築	相場より3割ほど高い値段で取引
景観活用上の工夫点	・状況に合わせて組織形態を変更 ・民泊経営による維持管理費の獲得 ・宿泊施設設備による農村体験拡大 ・住民による活用を促進	・状況に合わせて組織形態を変更 ・民泊経営による維持管理費の獲得 ・宿泊施設設備による農村体験拡大 ・住民による活用を促進	・地域資源の再生 ・間伐材使用による金銭負担軽減 ・有志のみで整備	・地域資源の再生 ・間伐材使用による金銭負担軽減 ・有志のみで整備	・NPO法人農村景観日本一を守る会を地域の窓口とし、営農組合が農地と作業員を提供することで協力 ・地区のシンボル、茅の宿の付近の農地を使用	農村景観日本一の景観価値を利用

以上より、近年取り組まれ始めた「茅葺民家の民宿化」や「農業体験の場づくり」などの来訪者の居場所をつくる活動は、茅葺民家での地産物の販売や、日本一の農村景観を付加価値としたブランド米の販売など、地域団体が自ら活動資金を捻出する取り組みへと発展していた。

このことから来訪者の居場所づくりは、継続的な来訪者の獲得を目指した仕組みの構築を可能とし、景観形成活動の持続的な発展につながると考える。

5. まとめ

富田地区の景観まちづくりは、「第三者からの景観評価」を端緒に、「伝統行事を活用した保全活動」を通じて多くの住民を巻き込み、「来訪者の居場所づくり」を行う景観整備による継続的な来訪者の獲得を図り、持続的な景観まちづくり活動へと展開していた。

なかでも第三者からの景観評価は、その後の活動の発展に大きな影響を与えるだけではなく、地元住民だけでは見出せなかった新たな景観資源の発見にも繋がることから、地域アイデンティティが必要とされる近年の農村地域での景観まちづくりの第一歩として有益となろう。

謝辞：本研究は、岐阜県恵那市景観計画策定プロジェクト（代表：佐々木葉／早稲田大学・教授）の一環で本調査対象地区を認識するに至った。その富田地区は、当プロジェクトメンバーの京都大学（代表：山口敬太助教）と共同で景観まちづくりワークショップに取り組み、これをきっかけとして日本大学が本調査に取り組んだ。

また、研究を進めるにあたり、協働で調査・分析にあたってくれた本学卒業生の江川玲大氏、情報収集にあたり多大なご協力をいただいた富田地区住民の吉村攻平氏、

細井健吉氏、小林正能氏、成瀬忠雄氏、樋田久吉氏、そして、岐阜県庁、恵那市役所の職員の皆様に感謝の意を表します

補注

※1 ACT事業とは、アグリカルチャートレーニング事業の略称であり、企業向け農業体験型研修のことである。

引用・参考文献

- 1) 曾根原久司：「村・人・時代づくり」, 学芸出版社, 季刊まちづくりvol. (16), p. 30, 2007. 9
- 2) 井上曲子：「文化的景観の保護制度」, 学芸出版社, 季刊まちづくりvol. (11), pp. 18~27, 2006. 6
- 3) 斎藤雪彦：「グリーンツーリズムで川や畑を守る」, 学芸出版社, 季刊まちづくりvol. (16), p. 43, 2007. 9
- 4) 宮前保子：「歴史的風土を構成する自然景観管理方策のあり方に関する研究」, 日本都市計画学会学術講演論文集 No. 34, pp. 49~54, 1999
- 5) 北澤大佑：「都市農村交流を活用した農村景観の保全・形成活動に関する分析」, 農村計画学会誌 No. 27, pp. 185~190, 2009. 2
- 6) 岩村町史刊行委員会：「岩村町史」, pp. 1~11, 143, 260~263, 426~428, 586~601
- 7) 江川玲大ら：「景観を活用した持続可能な地域形成に関する研究(その2)」, 第54回日本大学理工学部学術講演会予稿集, pp. 419~420, 2010. 11
- 8) 恵那市役所：「えな100」, p. 49, 2008. 3
- 9) 読売新聞東京朝刊：「[ふるさと地慢]日本一を訪ねる(34)」, 宮城3面, 2007. 9. 27
- 10) いわむら町まちづくり実行委員会：「まちづくり発足15周年記念誌」, pp. 44~46, 2001. 6

A Study on the Sustainable System of Regional Landscape -Case study of the regional plan process in the Iwamuracho Tomida district of Gifu-

Kazuyoshi MAGAMI, Norihisa YOKOUCHI, Tomohide OKADA, Masataka KAWASHIMA

The rural area of Japan has a serious problem about a population decline and low birthrate and aging. Therefore, the resident of the rural area cannot rely on only agriculture. It is important for the rural area that they try to the new local industry that uses agriculture. This paper reports the sustainable local planning that uses the rural landscape in the rural area. This area name is the Tomida district of Gifu prefecture. In this area this study grasped that the participation of a various organizations was important for a sustainable landscape planning.